

ローマ字がつなぐ
二人の芸術家
—小川詮雄と中井繁一—

原 舞子



図1|小川詮雄《漁村の夏》1914(大正3)年 三重県立美術館蔵

「コレクションによる特別展示 ルックバック：近代 洋画」(2025年4月26日-7月6日)では、近代洋画史を彩る著名な画家たちによる作品を多く展示しましたが、三重県にゆかりのある個性豊かな画家の作品も織り交ぜて紹介しました。なかでも注目を集めたのが、松阪出身の画家、小川詮雄(1895-1944)です。

小川は京都市美術工芸学校(現・京都市立芸術大学)で日本画を学んだのち、大阪で松原三五郎の天彩画塾、赤松麟作の赤松洋画塾に入り、洋画を学びました。その後、東京へ出て、家業である教育図書出版の有稲館東京支社を任されています。有稲館が刊行した鳥類図鑑の制作に携わった形跡はあるものの、画業全体はつまびらかではありません。なお、東京では画家たちとの交遊もあったらしく、洋画家の上野山清貢の《ムッシュ Oの肖像》(1915年、福島県立美術館蔵)のモデルを務めています。

志摩市大王町に取材した油彩画《漁村の夏》(図1)は、大正期の画家たちの多くが傾倒したポスト印象派の影響を感じさせ、小川が同時代の画家たちと同様の関心を抱き制作していたことがうかがえます。他方、ペン画(図2-3)は独特です。白と黒の明快な

画面構成は、挿絵に使用することを想定して描かれたゆえでしょうか。ただし、これらのペン画の用途はよくわかっていません。

メランコリックな雰囲気をたたえたモノクロームの世界は、19世紀末のイギリスで活躍したオーブリー・ビアズリーの作品を髣髴とさせます。ビアズリーの作品は大正期に雑誌『白樺』をはじめとする文芸雑誌で紹介され、日本の画家たちにも大きな影響を与えたことが指摘されています。版画家の長谷川潔、恩地孝四郎や、挿絵画家として活躍した竹久夢二などが特に知られています。印刷メディアの世界に軸足を置いていた小川が、当時刊行されていた雑誌からビアズリーの作品を見知った可能性は大にあると思われます。

しかし、小川のペン画の最も特異な点は、イラストの下部に添えられたローマ字の題名です。[KOINO HATE]、[MONOOMOI]、[ONNA TO NAMIDA NO TSUBO] —これらのローマ字が書き添えられていなければ、作品の印象はもっとありふれたものに感じられることでしょう。

ここでもう一人に登場願いましょう。熊野出身のローマ字詩人、中井繁一(号：醒郎、

1892-1954)です。中井は熊野市五郷村の郵便局に勤めらかたわら、ローマ字運動に参加し、ローマ字で詩を詠み始めます。1916(大正5)年には、全編ローマ字による詩集『KUMANO-KAIDOO』を東京の岡村盛花堂から出版。翌年に上京し、1923(大正12)年5月、渋谷に印刷屋「さめらう書房」を開業します。佐藤春夫や横光利一らとも交遊し、印刷屋を営みながら自身の詩集の出版を続けました。

小川詮雄と中井繁一。二人は同世代の三重県人であり、ローマ字を作品中に用い、印刷・出版を生業としていたという共通点を持ちます。二人を結びつけるものは、これ以上はまだ見い出せていませんが、興味は尽きず、今後調査していきたいと考えています。



図2|小川詮雄(KOINO HATE)1915(大正4)年頃 三重県立美術館蔵



図3|小川詮雄(ONNA TO NAMIDA NO TSUBO) 1915(大正4)年頃 三重県立美術館蔵

参考文献|田垣内利見『熊野の歴史を駆け抜けた人々(熊野石蔵美術館叢書I)』熊野石蔵美術館出版、2024年

表紙解説

「ライシテからみるフランス美術 —信仰の光と理性の光」展より
(2026年1月17日-3月22日)

鈴村麻里子



ロドルフ・ブレスダン《死の喜劇》1854年
リトグラフ・紙 22.0×15.2cm 三重県立美術館蔵

沼地には得体の知れない生き物たちが集い、草木が不自然に蠢いています。樹上で高らかに勝利を宣言するのは、擬人化された「死」。本作は、死が現世を支配するというキリスト教の教訓を描く「死の勝利」の系譜に位置付けられるでしょう。画面中央の洞の中では、足枷につながれた人物が顔を覆っています。洞の外で足を投げ出し、呆然とする人物の傍らには書物が置かれていますが、進むべき道は書物に示されていないのでしょうか。地上の二人は、画面左手のイエス・キリストらしき人物に気づく様子もありません。謎多き作品ですが、展覧会のサブタイトル「信仰の光と理性の光」を笑い飛ばすような描きぶりです。作者ブレスダンは幻想的で密度の高い作品を手掛け、多くの文学者に愛された版画家。本作は特定の場面の再現ではなさそうですが、タイトルからはテオフィール・ゴーティエの同題の詩集の影響も窺えます。

利用のご案内

開館時間|
午前9時30分-午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日|
月曜日(祝休日にあたる場合は開館、翌平日
[2025年10月14日(火)、11月4日(火)、11月25日(火)、
2026年1月13日(火)、2月24日(火)] 閉館)
年末年始(2025年12月29日(月)-2026年1月3日(土))

観覧料|
○常設展示[美術館のコレクション+柳原義達の芸術]
一般 310(240)円
学生[大学・各種専門学校等] 210(160)円
高校生以下無料 ※()内は20名以上の団体料金

○企画展示/その都度定めます。
※学校の教育活動として県内の幼・小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、引率者も含めて無料となります。
※障害者手帳等(アプリ含む)をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。
※家庭の日(毎月第3日曜日)の観覧料は、各展覧会(企画展/常設展)の団体割引料金となります。
※関西文化の日[2025年11月15日(土)、16日(日)]は常設展の観覧が無料となります。

メールマガジン|
三重県立美術館の情報を、みなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。購読料無料。
詳しくは、美術館ウェブサイトをご覧ください。

美術館公式X(旧Twitter)|
三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。Follow us on X @mie_kenbi

三重県立美術館

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM

〒514-0007 三重県津市大谷町11
TEL.059-227-2100(代表)
FAX.059-223-0570
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/



交通|
津駅(近鉄・JR)西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西田地循環」、「津西ハイタウン行き(むつみ・つつじ経由)」、「夢が丘団地行き(総合文化センター前経由)」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分
※できる限り公共交通機関をご利用ください

三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

年会費|
一般会員:3,000円 ペア会員:5,000円
グループ会員(4名):8,000円

◎特典|会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、レストラン・ミュージアムショップご利用割引等。詳細は三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232/美術館FAX)までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館
協力会賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

会費|年間一口
法人:50,000円 個人:25,000円
準会員:10,000円

◎特典|展覧会ならびに内覧会への招待、各展覧会のカタログ謹呈等。
詳細は三重県立美術館協力会事務局(TEL 059-227-2232/美術館FAX)までお問い合わせください。



三重県立美術館ニュース

HILL WIND 57

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM NEWS



三重県立美術館ニュース
「HILL WIND 57」

発行日|2025年9月24日(※無断転載)
企画・編集・発行|三重県立美術館 デザイン|満田尚子 印刷|株式会社アライブーン

2024 年度 クラウドファンディングによる 作品保全事業の報告

橋 本 三 奈

2024年9月3日－12月3日に実施した「クラウドファンディング型ふるさと納税～コレクションを活用保存し、次世代に～」では、多くの皆様より温かいご支援を賜りました。本事業は、次世代に作品本来のもつ魅力を伝えるため、コレクションの保全に必要な費用の一部を皆様からご寄附いただき、屋外彫刻の作品修復に活用させていただく活動です。

当館では所蔵品を活用、公開、継承していくため、開館当初より各専門分野の修復家による作品の状態調査を行ってきました。現在では6,000点を超える所蔵品を有しており、日頃から保存担当学芸員を中心に目視点検を行い作品保全に取り組んでいます。さらに、作品の状態に応じて経年劣化の進行を抑えるため、適切な保存修復や予防処置を行っています。

今回は、専門家による状態調査により処置を要する優先度の高かった2点、多田美波《作品91》（1991年、196×182×267cm）（図1）とジャコモ・マンズー《ジュリアとミレトの乗った大きな輪車》（1973年、200×450×125cm）（図2）を修復作品として選定しました。両作品ともに、設置されてから30年以上経過しているため、経年とともに変化した状態を生かしながら、2025年5月20日から4日間の日程で保存修復処置を行いました。

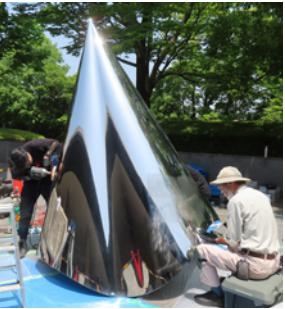


図1 | 【修復中】
鏡面の研磨作業

多田美波《作品91》

本作は、ステンレス・スチールによる円錐型が湾曲した独特のフォルムで、鏡面仕上げが施されています。この作品は、当館で開催した「多田美波展」（1991年8月3日－9月8日）に際し、正面玄関前のスペースを設置場所と想定して制作されました。展覧会終了後も同じ場所に展示され続け、翌92年に収蔵された作品です。

ステンレスは耐候性や耐食性に優れた素材ですが、作品に近づいたり離れたりしながら周囲の映り込みも含めて鑑賞するため、思いがけず作品に接触した際の手跡や引っかき傷が多々見られました。また風雨の影響によって作品の鏡面に木の実や枝が作品に接触し、傷つくこともあります。本作は2019年に鏡面磨きの修復処置を行っていますが、その後の状態調査で鏡面の傷（図3）や表面の白濁化、付着による変色がみられ、日常の清掃だけでは鏡面の輝きを取り戻せない状態でした。

今回の修復作業では、これらの損傷を軽減するため全面再研磨を施しました。鏡面の傷の深さによって研磨剤や研磨布を使い分けて丁寧に磨くことで鏡面の光沢を取り

戻すことができました。光沢を維持するために撥水効果のある表面保護剤を塗布し、修復処置を完了しました。

ジャコモ・マンズー

《ジュリアとミレトの乗った大きな輪車》

この作品は、当館が初めて所蔵した彫刻作品で、開館時より中庭に設置されています。一輪車に乗っているのは、ジャコモ・マンズーの娘ジュリアと息子ミレト。幼い二人が遊ぶ姿から着想を得て制作されました。作品の台座に使われた伊賀焼タイルは、当館の内外装と同じものが貼られています。その台座の側面にはめ込まれた金属製のキャプションには、マンズー直筆による名前、作品名、制作年が刻まれています。これは、作品を収蔵した際に当館へ贈られたものです。

ブロンズで制作された本作は、屋外に設置されているため、雨や太陽光の影響で作品の表面が劣化し変色していました（図4）。さらに、経年により表面保護に塗布されたワックスの効果が弱くなり、鳥のフンや木の実が表面に付着することで金属が腐食し、錆などの変色が生じていました。また、台座のタイル表面はカビや苔、そして腐食による変色や鉄錆による汚れが目立つようになり、



図2 | 【修復中】保護剤の塗布作業

水洗いでは除去できない状態でした。これまでの定期的な状態調査により、ブロンズの劣化が更に進行する可能性があることがわかり、このたび修復処置を施しました。

今回の修復作業では、表面全体を特殊な中性洗剤で洗浄した後に、古いワックスが残っている部分を溶剤で除去しました。そして緑青色に変色した表面に特殊な水溶液を塗布することでオリジナルの黒茶色に近づける復元作業を行い、防食防汚剤を塗布した後に特殊なワックスを塗布しました。台座のタイルにみられた汚損は、特殊な洗浄剤等で除去し、オリジナルの色調を回復する処置が行われました。



左、図3 | 【修復前】鏡面の損傷部分

右、図4 | 【修復前】天板表面の変色部分

当館の屋外や中庭には、この2点を含む計13点の立体作品が設置されていますが、恒久的に屋外で展示するには脆弱な素材を用いて制作された作品も多くあります。そのため、専門家による定期的な状態調査は今後も継続して行い、必要に応じて保守作業を実施していきたいと考えます。また劣化の進行を少しでも抑えるため、美術館ボランティアと清掃に取り組みながら日常的な維持管理につとめます。

謝辞 |

当館の作品保全活動に多大なるご支援をいただいた皆様、当館の活動にご理解ご協力くださるすべての皆様に、この場をお借りして心より厚く御礼を申し上げます。

伊藤小坡コレクション はじまりの一步

道 田 美 貴

はじめに

三重県伊勢市にある猿田彦神社の宮司の長女として生まれた伊藤小坡^{しょうは}（1877–1968）は、三重を代表する日本画家です。四条派^{しやうりん}の流れを継ぐ郷土の画家・磯部百麟^{ひゃくりん}に手ほどきを受けた後に上洛。百麟と同門の森川曾文^{そぶん}、その後は有職故実に長けた歴史画の第一人者・谷口香嶠^{こうきやう}のもとで研鑽を積みました。大正期には、女性の日常の一酌^{ごま}や母と子の何気ないやりとりなど、自身の経験に基づく身近な生活の一場面を描き、高い評価を得ています。昭和に入ると、



図1 | 《ふたば》1918年 190×101cm



図2 | 《元禄頃美人教示之図》1951年 189×346cm

歴史や物語に登場する女性を多く手掛け、京都画壇に確固たる地位を築きました。

1981年《ふたば》、《元禄頃美人教示之図》

三重県立美術館では、開館前の美術館建設準備室時代から、小坡を郷土ゆかりの重要な日本画家と位置づけ、作品収集に着手。開館前年の1981年には、第12回文展入選作の《ふたば》（1918年）（図1）と《元禄頃美人教示之図》（1951年）（図2）、さらに下絵22点、写生帖6冊を収蔵しました。ここでは、小坡コレクションの基盤となったこれらの作品を概観します。

庭先で朝顔の苗を植え替える母娘を描いた《ふたば》は、画家自身と三女をモデルとした作品で、最後まで小坡の手元に残されていたとされています。ふたばになぞられ、娘の成長を願う母の想いが込められたこの作品は、小坡の代表作に数えられ、当館コレクションの中でも絶大な人気を誇る1点となりました¹。もう一方の《元禄頃美人教示之図》は、江戸時代風俗を主題としています。『源氏物語』を手にした遊女^{おうえ}と鸚鵡^{かむろ}を愛でる禿^{かぶ}が視線を交わす様子が描かれた、他の小坡作品とは趣を



図3 | 美術館のコレクション展示風景（2006年度常設第3期）

異にする作品です。制作年も主題も異なるこの2作品から、当館の小坡コレクションははじまりました。

下絵の魅力

下絵と写生帖も、《ふたば》と同様に小坡が手元に留めて遺族へと受け継がれた資料で、ご遺族や関係者のご厚意により寄贈を受けることができました。22点の下絵は、表装されていない、まくりと呼ばれる状態で収蔵されました。作品保全と展示活用を考慮し、その中から11点を順次修復、額装への形状変更を行いました。第13回新古美術展覧会五等賞受賞作《母子図》（1908年）、第9回文展三等賞受賞作《製作の前》（1915年）、第10回文展出品作《つつきもの》（1916年）、《祇園町の春》（1916年）、《ふたば》（1918年）、《父のあと》（1918年）、第2回帝展出品作《夏》（1920年）、第4回帝展出品作《山羊の乳》（1922年）、第9回帝展出品作《秋草と宮仕へせる女達》（1928年）、第11回帝展出品作《伊賀のつばね》（1930年）、第13回帝展出品作《夕ぐれ》（1932年）と出品作の下絵を中心に処置を実施、当館内外で公開を重ねています。とりわけ、

《母子図》、《製作の前》、《祇園町の春》については完成作品が所在不明であることから、貴重な資料となっています。《祇園町の春》については、下絵裏面の書き込みにより、第10回文展のための草稿であることもわかっています。

むすびにかえて

このころ11点の下絵は、現在もまくりのまま保管されており、その中には、先述の《元禄頃美人教示之図》の下絵2点も含まれます。禿が描かれた左側の下絵の裏面には、「寛永頃之遊女／昭和廿六年／（依頼主名）依頼／二曲一双」と記されています。ここから、この作品が依頼を受けて制作されたこと、主題等に依頼主の意向が反映されている可能性が高いこと、さらには、最終稿に近い段階で「寛永頃之遊女」としていう画題を採用したことわかります。さらに、遊女を描く右側と禿を描く左側を各々独立させ、二曲一双に仕立てる予定であったと考えれば、それらを二曲一隻に仕立てた現在の作品が極端な横長であることもうなずけます。より慎重に検討を進める必要がありますが、下絵の裏書がこの作品の理解を深める一助となることはまちがいないでしょう。他の下絵についても、改変箇所や書き記された文字から作家の思考の跡をたどり、作品の理解を深めるとともに、画像を含めた情報の公開をめざします。

1 | 貴家 映子「ザ・ベストテン コレクション展作品人気投票 結果発表」[HILL WIND]42 2018年